２０２６．６

藤沢市議会議員

たけむら雅夫 市政レポート

たけむら雅夫ホームページ http://takemura.blue.coocan.jp/

藤沢と朝鮮通信使

ー私たちのまちに刻まれた平和外交の足跡ー

変わる「鎖国」観

以前、私たちは学校で「鎖国」についてこう習った（教えた）かもしれません。

> 江戸時代、日本は長崎の出島でオランダ、中国と貿易をする以外、外国とのつきあいはなかった。

でも最近は、違う説明がされるようになってきました。それは特に朝鮮との関係です。

江戸時代、幕府と朝鮮王国は貿易だけでなく正式な国交関係を持っていたのです。将軍の代替わりの際には、朝鮮国王のお祝いの国書をもった使節団が日本を訪れました。これが「朝鮮通信使」です。

「通信」とは、「信頼」を「通わせる」という意味です。器楽を演奏し華やかな衣装を身にまとった異国の行例は、江戸時代の人々から熱狂的な歓迎を受けました。「鎖国」のイメージがずいぶん違ってくるのではないでしょうか。

通信使は対馬を経由して瀬戸内海までは海路、そこからは東海道を通って江戸までやってきました。

通信使が来訪した地としては対馬や鞆の浦などが知られています。しかし、藤沢にあった「藤澤宿」にも通信使が何度も宿泊し、当時の人々と交流が行われていたことはあまり知られていませんでした。

通信使は藤沢にも宿泊した

こうした中、藤沢の学校の先生たちの間で「通信使の授業をしたい」という声があがりました。

「教室には在日コリアンの子どもも日本人の子どももいる。日本と韓国・朝鮮の関係が微妙になりがちだからこそ、どちらの子どもも元気になって繋がりあえるような、未来に向けた授業がしたい」というのです。

この声を踏まえて小さな研究会が立ち上がりました。私は昨年「藤沢と朝鮮通信使　私たちのまちに刻まれた平和外交の足跡」と題する講演をさせていただきましたが、それはこの研究会での報告がベースです。

通信使が宿泊したのは大名などの宿である「蒔田本陣」です。残念なことに蒔田本陣の跡は残っておらず通信使が残した書画なども見つかっていません。こうしたこともあって「通信使が藤沢を訪れていた」という歴史は藤沢でもあまり知られていなかったのです。

▲ 蒔田本陣の説明板

そこで、当時私たちは「通信使が藤沢を訪れていた記録を何かの形で残してほしい」と教育委員会に要望しました。

これを受けて、蒔田本陣跡の案内板に「通信使が宿泊した」という説明が加えられるようになりました。

また「藤沢宿交流館」という施設が完成した際、ホールに通信使についての詳細な説明が掲示されることになりました。

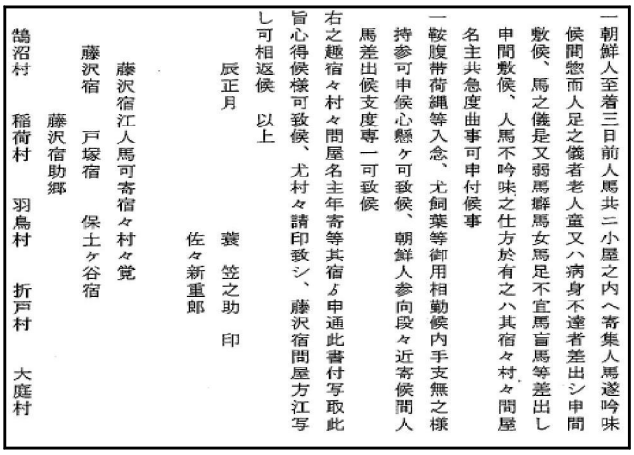
▲ 藤澤宿交流館

これ以来、韓国からの来訪者を迎える際や子どもたちの地域学習の折にはこれらの場所が使われるようになり、通信使の歴史は少しずつ知られるようになっていきます。

文書に残る記録

一方、史跡は残っていませんが当時の記録文書は残っていました。通信使には宿泊の際、贅を尽くした食事が提供されました。その際の食材や荷物を運ぶ人馬などは近隣の村から調達されたのですが、その記録が残っていたのです。

文書には「鵠沼村」や「辻堂村」など、今日も残る地名が出てきます。授業で自分の住むまちの名前に出会うった子どもたちは目を輝かせてくれました。



一朝鮮人至着三日前人馬共ニ小屋之内へ寄集人馬遂吟味候間愈而人足之儀者老人童又ハ病身不達者差出シ申間敷候、馬之儀是又弱馬癖馬女馬足不宜馬盲馬等差出し申間敷候、人馬不吟味之仕方於有之ハ其宿々村々問屋名主共急度曲事可申付候事

一鞍腹帯荷縄等入念、尤飼葉等御用相勤候内手支無之様持参可申候心懸ヶ可致候、朝鮮人参向段々近寄候間人馬差出候支度専一可致候

右之趣宿々村々問屋名主年寄等其宿ゟ申通此書付写取此旨心得候様可致候、尤村々請印致シ、藤沢宿問屋方江写し可相返候　以上

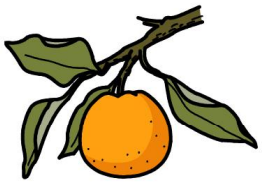
辰正月　　裏　笠之助　印
　　佐々新重郎

藤沢宿江人馬可寄宿々村々覚

藤沢宿　戸塚宿　保土ヶ谷宿
藤沢宿助郷
鵠沼村　稲荷村　羽鳥村　折戸村　大庭村

またこんな素朴な交流もありました。「海游録」という通信使側の記録に出てくるエピソードです。

> （藤沢宿を）出発して行くこと１０余里。樹陰を過ぎるごとに倭人が蜜柑の枝を折って行列に投じてくれた。皮をむいて噛むと香しい果汁が渇した喉をうるおし、五感がやわらいだ



豪華なごちそうの話よりこんな素朴な人々との交流の話に私は心惹かれます。

先生たちはこうした資料を集め、朝鮮通信使の授業を地域学習や人権・平和教育として進めていきました。

「チャルメラ」をめぐる新説

「藤沢には通信使の足跡を残す建物や文物はない」と思われてきました。しかし最近になって、新しい研究成果が得られるようになりました。

藤沢の観光地である江の島には「唐人囃子」という伝統行事が残されています。これは“チャルメラ”という楽器が使われる異色の行列です。

唐人囃子の由来については従来「難破した中国の船員から伝わった」などとされてきました。ですが私たちはこの説には疑問を持っていました。

そもそも江戸時代、「唐人」とは中国人だけでなく外国人全般を指す言葉です。また“チャルメラ”も中国を連想しがちですが、これは通信使が行列の際に使った楽器です。ですから私たちは「唐人囃子は朝鮮通信使を見た人たちがそれを真似たものではないか」との仮説を持っていたのです。

しかし確証もないまま迎えた２０２２年１月、ＮＨＫの「ブラタモリ×鶴瓶の家族に乾杯『江の島参りでブラブラ乾杯！』という番組の中で、日本大学の押田佳子准教授が唐人囃子についてこう説明されたのです。

▲ チャルメラを吹く通信使

「朝鮮通信使が街道沿いを練り歩いていたのを見て取り入れたと云われているチャルメラも入った賑やかなお囃子です」

もしこの押田先生の説が正しいなら、藤沢には通信使の来訪の記憶が無形文化財として残されていた、ということになります。

朝鮮通信使、ユネスコ世界遺産に登録

なぜ「通信使」が生まれたのでしょうか。

その理由は元を辿れば秀吉の朝鮮侵略です。秀吉軍は陶工や女性など、およそ５～７万人と言われる人々を日本に拉致しました。伊万里焼や萩焼などはこうして連れてこられた人たちの技巧から生まれたものです。

ですから朝鮮にとって、二度と戦火を生まないことと同時に、この連れ去られた人たちを救い出し連れ戻すことが重要な課題だったのです。

一方、豊臣政権が倒れたのち実権をにぎった徳川氏にとっても、国内の平定こそが重要な課題で海外と対立することは望ましいことではありませんでした。

そこで朝鮮と江戸幕府の間に立って、身命を賭して国交の回復に奔走したのが対馬藩です。対馬は平地も少なく、農業は盛んではありません。朝鮮との交易で成り立っていた玄界灘の小藩・対馬藩は、平和でなければ立ちゆかなかったのです。

２０１７年、朝鮮通信使は韓国と日本の市民の共同申請によってユネスコの世界記憶遺産に選定されます。「朝鮮通信使には悲惨な戦争を経験した両国が平和の時代を構築、維持していく方法と知恵が凝縮されている」というのが選定の理由です。

いま、日本では排外主義が台頭しています。そのようなときだからこそ、私たちのまちに伝わる「平和外交の足跡」を伝え、「共に生きる」多文化共生の取り組みを進めていきたいと思います。

（この文章は２０１６年のレポート「藤沢は江戸時代の国際交流の舞台」に最新の知見を加えて書き直したものです）